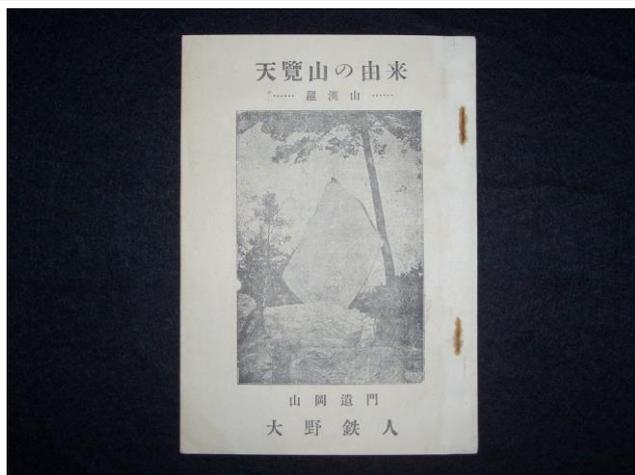


説経節『天覧山物語の一端(矢納めの條)』

引間 隆文



『天覧山物語の一端(矢納めの條)』



『天覧山の由来—羅漢山—』

12月11日まで開催している特別展「天覧山」。連日、大勢の方にご来館いただいております。まだご覧になっていない方は、この機会にぜひお越しください。

さて今回の「今月の一品」は、スペースの都合から特別展で展示できなかった天覧山に関する資料をご紹介します。

説経節は、中世を起源とする語りの芸で、昭和20年代まではとてもポピュラーな芸能でした。飯能で活躍した説経師は多々いましたが、その中でもひととき異彩を放つのが若松国土太夫こと大野嘉太郎です。

大野は、吾野村北川(現・大字北川)の出身です。「山岡遺門」を名乗るほど山岡鉄舟に傾倒し、一時は山岡の遺族の支援活動にも奔走しました。また、「大野鉄人」のペンネームで飯能の歴史を題材とした説経節を創作しました。

『天覧山物語の一端(矢納めの條)』も大野の作品の一つで、飯能戦争の際の天覧山・能仁寺を舞台としています。主人公は「友成郷右エ門安良」で、燃え盛る能仁寺から仏像や親王真筆の額を友成らが救出する場面が山場となっています。

大野は、昭和29(1954)年に『天覧山の由来—羅漢山—』という小冊子も発行しており、こちらには「史実」として友成らの活躍が記されています。他にも、山岡鉄舟の意をくんだ明治天皇の決断により明治16(1883)年の飯能行幸が決まったことや羅漢山から天覧山への名称変更は「令旨」(皇族からの命令)によるものであったことなども記されています。

これらの話は、飯能近在の「古老男女四十八人」や山岡鉄舟の家族からの聞き書きを基にしたと記されていますが、裏付けとなる確実な資料は見つかっていません。また、誤りや脚色されている記述が多いことから、史実に基づく歴史資料と言うより創作された「物語」だと言えます。

ただ、説経節を創作したり小冊子を発行したりして天覧山そして飯能を盛り上げようとした先人が飯能に実際にいたことを示す資料としては、高い価値を有しているとも言えます。

山は数々ありますが、人文・自然の両面から深く掘り下げることのできる山は、そうはありません。その意味でも天覧山は、誠に稀有な山なのです。